

平成 29 年度 第 4 回「防災スペシャリスト養成」企画検討会

議事概要

1. 検討会の概要

日 時：平成 29 年 12 月 22 日（金）10:00～12:00

場 所：中央合同庁舎 8 号館 5 階 共用 A 会議室

出席者：林座長、井ノ口委員、牛山委員、宇田川委員、大原委員、鍵屋委員、国崎委員、黒田委員、重川委員、田村委員、中林委員、丸谷委員、渡邊委員、緒方アドバイザー、海堀政策統括官、伊丹審議官、安邊参事官、重高企画官、小林参事官補佐

2. 議事概要

議題ごとに各委員による意見交換を行った。主な意見等は次のとおり。

(1) 有明の丘研修(第2期)講座と「平成 29 年度 研修指導要領」の見直し(全 10 コースの報告)

- 難易度など確認テストの問題作成の目安としては、教えるべきことが伝わったかどうかを確認するためのテストとすることを基本とし、素直な問題で構成することとする。
- 今後は、教えなければならないことと、実際に教えていることとの不整合がなくなるよう、研修を通じて「研修指導要領」を継続的に見直す。

(2) eラーニングの作成(デモの実施)

- テストバッテリーの考え方から言えば、同じターゲットで設問数が増えれば増えるほど良いといえる。問題全体を見て難易度が揃うよう、不適格な問題ははじきながらテストバッテリーを充実させるべき。
- 内閣府が直轄で実施している「防災スペシャリスト養成研修」としての最終成果は、「研修指導要領」と「標準テキスト」と「テストバッテリー」ではないか。将来的にはデータを蓄積し、「研修指導要領」と「標準テキスト」と「テストバッテリー」を改善していくことが重要ではないか。
- 単元でランダムに出た最初の問題が正解であれば次の単元に進むという仕組みよりも、最初から全ての問題を解いてもらった方が良いのではないか。
- 一つの単元で教えていることは一つであるという前提に立ち、その内容を幾つかの違った形で表現しているというのがテストの本質である。ある問題を解いてみて、理解していれば正解する確率は高くなり、理解していなければ失敗する確率が高くなる。その

蓋然性から、単元の問題一つに正解すれば次に進めると考えている。

- 初歩の入試テクニックで正誤が判定できてしまうような、明らかに間違っていると分かる問題はなくすよう、問題を改善していくとよい。
- 「テスト」が中心で、「教材」が補助という位置づけに違和感がある。教材が補助という位置づけだと、あまりやらなくてもいいといった逆メッセージになってしまう。
- 現在の「補助教材」という名称が良くないので、「標準テキスト」と変更すべき。
- 受講者が学習レベルに応じて使い分けできるよう、「テスト」と「教材」のどちらからでも受講できるようにしておくべき。その際、「標準テキスト」の受講は必須ではないこと、「テスト」をパスすることは必須であることを明示すべき。
- 事前学習の修了後のアンケートでは、有明の丘研修でどのようなことを学びたいかということも含めて聞くといいのではないか。
- 事前学習に要する時間の目安が分かると取り組みやすい。所要時間を表記すべき。
- 環境によっては、パソコンを見ている時間が違うと思われる。ログインしている時間(事前学習にかかった時間)や、時間帯のログを取得するとよい。
- ログを研修に反映させることが非常に重要である。これらのログをどう評価し、研修をどのように改善したらよいかを知りたい。
- 将来的には、ログという貴重なデータを活かすために、ある期が終わった後にコーディネーターと講師が集まり、ログの結果を基に研修を改善するための議論の場を持つ必要がある。
- 講師にとっても、事前学習をしてきた受講者が何をどう思ったか等のログを研修に反映しなくてはならないという、新しいチャレンジに入らと思う。
- 今回の e ラーニングの試行において、受講者からできるだけ多くの意見を訊き、また、講師にもそれを踏まえてどう思われたかを教えていただきたい。集めた意見等から、今後、どのように進めていくとよいかのかが分かってくるのではないか。
- 我々が目指しているのは「研修指導要領」と「標準テキスト」と「テスト」の間の整合性の向上であり、eラーニングはそれら全体の整合を図るための新しいルートだと考えられる。そういった意味でも、新しい時代に入ると認識するのは確かに重要である。
- 事前学習としての eラーニングは、単に知識を確認するというだけでなく、関心を高めるところもあることを意識しておく必要がある。
- 間違えたものに×を付ける問題の場合は、何が間違いなのかがはっきり分からないような問題(何が間違いかを迷うような問題)は避けた方がよい。何を間違えたのかが分からないような問題については、設問後の解説を丁寧にした方がよい。
- BookRoll で、10 コースある教材の閲覧状況(コース間でジャンプして閲覧している状況)を色で把握できるようになるとよい。

- 受講者がシステム操作に迷わないよう、ボタンなどの機能について丁寧に説明すべき。
- 受講者のほとんどはBookRollの使い方を知らないなので、使い方をしっかり理解してもらってからコースを選ばせ、学ばせるようにしてはどうか。

(3) 能力評価(個人/組織)の仕組みの検討

- 研修後の個人の成長に対する自己評価や組織への貢献度など、研修を受けた人と受けていない人との間でどういう違いがあるかを調査するとよい。
- 地域特性が似ている地域間で修了者数に差が出ている。応募の動機など、その差の原因を調査し、比較するとよい。
- 関西で研修を実施している「人と防災未来センター」のデータも考慮した方がいいのではないか。
- 修了者数が極端に多い地方の市町村の場合は、近年に災害対策本部を設置するような経験があったかどうか一つの鍵になるのではないか。
- トップ 20 の地方公共団体に対して、(小さな規模でもよいので)災害対応を行った際の研修の効果について訊いてみるのが重要だと思う。
- 職員には人事異動があるため、有明の丘研修で得たものが組織内にどのように蓄積され、組織としてどのように防災力が向上しているかを把握する必要がある。まずは、熱心に参加している組織に対して研修成果の共有の仕方などについてヒアリング調査するとよい。その結果は、アンケートの設計にも活かせる。
- 受講者の年齢や所属部署の構成についても把握したい。
- 今後、防災スペシャリスト養成研修を地方自治体に広く受講するよう呼びかけていくなれば、同研修のビジョンのようなものを示していく必要があるのではないか。
- 地域別総合防災研修の修了者数は有明の丘研修の半分以上もあり、今後、地域別の研修の在り方についても時間をかけて検討する必要がある。
- 各地域での研修の受講状況について都道府県に報告するとよいのではないか。
- 人的ネットワークの形成への参加資格の要件を研修修了とするのがよいのか検討が必要ではないか。